

# 「1つ」と「或る」 不定冠詞の1考察

有田 潤

## § 1 . 身近かな問題

ソスユール以来言語研究は著しい発達を遂げ、門外漢にはまったくうかがいしれないほど専門化が進んだ。その結果、微細な相違を表現するための用語も次々に考案され、語数はふえるばかりである。しかし言語の問題はそういう方面にのみあるわけではない。もっとはるかに身近かところにも、簡単に見過ごせない難問がころがっており、そういう論点を深く考察するのも専門研究に劣らず意味があるであろう。ここに述べるのはそういう「幼稚な」問題の1つである。

This is a boy.

これは中学一年生がはじめて英語を学ぶときの文章である。言語の専門家はむろんこのような文を取りあげないであろう。しかし問題はこの“a”をどう説明するのか、ということである。本稿ではこの不定冠詞を考えてみたい。

## § 2 . 「1つ」と「或る」

岩波の『英和大辞典』のaの項には最初に、

(1) ある1つ[1人]の、(2) ある(a certain)

と書かれている。日本語では1個、ひとり、1回、ひと瓶、などと、ものの数を挙げるときに補助名詞を用いるから、「1つの人間」とはいわずに「ひとりの人間」といわねばならないが、煩瑣であるから、以下ではたいてい「1つ」で通すことにする。さて、(1)では「ある1つ

*Cercle linguistique de Waseda (ed.),*

*Travaux du Cercle linguistique de Waseda vol. 4, 2000, 1-7.*

の」のように「或る」と「1つ」を1語に繋げているが、文例をみると「1通の」「1人の」になっており、「或る」は出てこないから、この(1)は訳語として「1つ」を掲げるのが主眼で、「或る」の方は(2)に委ねたのであろう。とにかく以上によって不定冠詞の訳語に少なくとも「1つ」と「或る」の2語が可能なのが確かめられた。

ところで、この2つの訳語は英語だけのものではない。独、仏、伊、西の辞典はすべて不定冠詞の訳語にまずこの2つを与えている。むしろ訳語がこれにかぎるなどということではないから、一言ことわっておきたい。Haben Sie sonst noch eine Frage? は、

ほかにまだなにか質問がありますか。

であって、「或る質問」とはいえないし、「1つの質問」は直訳としても奇妙である。「1つ」「或る」以外の、「なにか」のような訳語はまた別の問題になるから、ここでは扱わないことにして、2つだけにしぼって先に進むことにする。

備考:「ある」と書かないで「或る」と漢字を用いるのは存在の「ある」との混同を避けるためである。

### § 3 . 手段としての訳語

「1つの」と「或る」が不定冠詞 ein, a, un 等の訳語ということになったが、しかしこれは奇妙ではなからうか。なぜなら「1つの」は種々の用法 「ひとついかがですか?」のような があるにしても、その起源からいえば、数詞1の観念から発しており、一方「或る」には数の観念はまったく含まれず、それ自体は「不定」の観念を示すだけだからである。問題は、

1つの語に対して意味になんら共通性のない2つの訳語が可能なのはどうか?

ということである。1つの語に訳語がいくつも可能であることはべつに珍しいことではない。しかしこの2語は内容的に関連がない。起源から考えて「1つの」の訳語はこれらの不定冠詞に近いとはいえる。フランス語、イタリア語等のロマン諸語の不定冠詞はラテン語の数詞

unus, una, unum に由来し, ein は同時に数詞であり, 英語の a は ân (OE=数詞, one) > an > a という経過をたどっているから, 不定冠詞に「1つの」を当てることができるのは不自然ではない。しかしそうなると「或る」の由来が分からない。

ここで, 訳語を考察の手段とすることの可否を考えてみよう。外国語を扱う場合に「日本語で考えるな, 日本語を考えるな, 原語は原語で考えよ」といわれる。英和辞典でなく, 英英辞典を, というわけである。筆者はこの考えを一概に退けるつもりはない。しかしたとえば ein や a や un を日本語抜きで理解しようとして, はじめに掲げた a certain や ein gewisser, irgend ein, un certain, un certo などを原語の辞典で読んだときに, この certain, gewiß, certo などの「意味」は結局「或る」またはそれと類似の訳語で理解せざるをえないから, 問題はもとに戻るであろう。それに, 日本語とヨーロッパ語のように系統の異なる言語間では, 翻訳することの困難な, あるいは不可能な語

豆腐, 下駄, 花見, 鶏が鳴く もあるが, 一方, 原語では表面化しない要素が訳語のお蔭で浮きでてくるのが少なくないし, 翻訳によってしか切実な感じの出ない場合もあるということを考慮すべきであろう。

#### § 4 .ein の存在理由

不定冠詞 ein は有数名詞の単数形につく。

さて Das ist ein Buch. という文は「これは本である」と訳されるが, ein が訳されていないようにもみえるから, 誤訳かも知れない。あるいは逆に「この独文に ein がついているのはなぜか」とドイツ人に尋ねてみることもできよう。答えの1つは,

ein は「1つ」を意味するから, 本が1冊であることを示すために用いられたのだ,

となるかもしれないし, 実際にこう答える人がいても別に間違いとはいえない。しかしこれでは 50% の答えにしかならない。ein をつけなくとも単数であることは明瞭だからである。ドイツ語の名詞はたいいてい語形そのもので単・複を区別できる。むろん Onkel「叔父」, Mittel

「手段」, Ritter「騎士」, Leben「伝記」のように、格によっては単・複を区別できない語もあるが、こういう語はそう多くはないし、どうしても数を明示したければ、ほかに方法がある。それに実際の文は単語集ではないから、前後関係というものがあ、り、単・複はおのずから明らかなのである。すなわち単数であることを示すため、という説明は誤りではなくても十分な答えではない。

では次に、「或る」を示すためだ、という説明はどうであろう。  
Das ist ein Buch.の場合には「これは或る本だ」とはいえないが、

Es war einmal in einem Dorf ein alter Mann, ...

の文では事情が違、う。ein を無視して「むかし村に老人がいた...」でも間違いではないが、「或る村にひとりの老人がいた...」とするほうが日本語としてよく通る。これと同様にドイツ語でも「或る」のつもりで in einem Dorf とするのだ、と考えればよい。だ、いいち ein を「不定」冠詞と称するのは「1つ」よりも「或る」に重きをおいている証拠であろう、...

以上の説明はそれぞれ一長一短があり、ein の存在理由としては、やむをえないとはいえ、完全に人を納得させるものではない。そもそも冠詞をもたない言語が存在するということ 日本語や中国語ばかりでなく、ヨーロッパ語でも古代ではラテン語、今日でもロシア語、また古代のギリシア語では不定冠詞がなかった を考えると、「1つ」や「或る」から冠詞の存在を弁護するのは困難なように見える。ではどう考えればいいか。筆者は、

冠詞というものは過剰な、あえていえば余計な品詞だ、

ということを確認する必要があると考える。むろんいったん冠詞が成立した言語では、それが文中で果たす機能、役割を無視することはできない。筆者が冠詞過剰論をいうのは、冠詞の機能を根本的に把握するには、この認識から、具体的には無冠詞形から、出発するのが最も効果的だとみるからである。

## § 5 .ein と「1つ」の相違

今度は ein と「1つ」が同じかどうかを考えてみよう。

Das Auto ist ein Verkehrsmittel.

自動車は交通手段である。

この訳文では ein は訳されていないし、少なくともそうみえる。そこでこれを日本語にしようとする、「自動車は1つの交通手段である」となろう。しかしこの「1つの」交通手段という日本語は間違いではないにしても、なにか煩わしくくどい感じがする。だいいち ein を訳語で示さなくても、上記の日本語は別になんの不足も感じさせない。この事実は何を意味するのだろうか。

日本語の「1つ」がやや不自然な感じを与えるのは、ein に比べて「1つ」は数の観念が明確・強烈だという事実による。

言い換えれば、不定冠詞 ein は起源はともあれ数観念が微弱になったのである。無冠詞言語が不定冠詞なしですますことのできる原因の1つはここにある。「微弱」ということの意味は、

「1つ」と違って、ein は 2, 3, 4, ...と対立していない、

ということである。対立は言語の本質である (Saussure, Cours de linguistique générale, , c.4, § 4 .)。

ein は数詞に由来するが数詞ではない。ein Uhr は純粹の数詞であるから、「或る」にならないが、eine Uhr は「1つの時計」にも「或る時計」にもなり、eine を無視することもできる。「1つの」にも「或る」にもなり、無視しても不自然な感じを与えない、という点が不定冠詞の不定冠詞たる所以である。

先に ein の訳語はまず「1つ」か「或る」であることを確かめた。これは日本語に冠詞がないところから生まれた苦し紛れの訳語には違いないが、しかしそれが勝手気ままな単なる思いつきでないことは certain などの辞典の語義説明でも明らかである。以上で、この2つの相異なる訳語の成立を説明する準備が整ったとおもう。

## § 6 . 言語習慣

ドイツ語で（ドイツ語にかぎらず他のいくつかのヨーロッパの言語で）、本来「1」を表わすにすぎない ein なる語を2とおりの意味に使用する 言語習慣が近世になって確立した。その事情は次ぎのようなものであったろう。

備考：古英語にはなかった。英語での不定冠詞の出現は12世紀中頃だといわれる。発生時期は言語によって異なるであろう。いずれにせよ、用法が確立したのは近世のことである。

(1) 1個のものを表わす単数名詞に、数詞 ein から派生した ein なる語を被せる。たいていは語形だけで明らかであるから、はじめは絶対的ではなく、ein を被せること「も」できた、ということであったろう。これはしいて訳せば「1つの」である。たとえば、空中を飛んでいる何かがあり、「あれは～だ」といいたいときに、「あれは」を Das で表わし、それが Vogel と総称されるものの「1つ、1例、1見本」である、という考え方を背景にして、

Das ist ein Vogel.

とする表現形式ができあがった、と考えられる。この場合には「1羽の鳥」とはいえるが、「或る鳥」にはならなかった。

(2) ところが、「どの」「どれ」という具体的な指示、指定をしない場合、すなわち不定、未定の概念を表わす場合にも、数詞に由来するこの ein を用いるという 言語習慣が生まれた。言語習慣は言語記号と同様に「恣意的」である。

この「不定」「未定」の語感は日本語では「或る」で表現される。

Das hat mir ein Journalist gesagt.

これは「或る」ジャーナリストから聞いたんですよ。

ここで「ひとりのジャーナリスト」といったのでは、間違いではなくとも、なんとなく不自然な、くどい感じがする。その理由は、当該の人物を1見本、1例として分類するつもりがなく、知り合いの記者ではあるが、それがだれであるか、という特定、限定、指定を避ける、という点に立言のポイントがあるからである。「避ける」場合以外に特定ができない場合もある。

むろんこういう場合に すなわち特定・限定を避ける場合に  
どんな語を用いるかは各個別言語の問題であって, ein, a, un などの  
数詞起源の語を用いたのはいわば偶然である。こういう言語習慣が成  
立するのは通時的現象であるが, 通時現象すなわち言語変化に必然性  
はない。半世紀前のわが国では, 官吏は[クゥンリ]と発音するのが「正  
しい」とされていた。現在ではこれは, 「正しい」かどうかはともかく,  
奇妙で滑稽であろう。ところでこの言語変化に必然性があるだろうか。

以上みたような不定冠詞成立の歴史的過程を考えると, 1つの語 ein  
に異質の訳語を当てることの理由が理解できるのではないかとおもう。

2000年3月